

佳作

『その日のまえに』 重松清著

法学部 法律学科 2年 関根純

死とは突然訪れるものだと思われる。しかし、自らが死ぬ日、「その日」に向かって準備を進める死もある。「その日」に向けて私たちは何ができるのだろうか。また愛する人の「その日」をどう迎えることができるだろう。そう考えるきっかけをこの本が与えてくれた。

本書は生と死をテーマにした七話が編集されている連作短編集である。最後の三話で前の四話が全て繋がる構成になっている。自らが余命宣告された話、家族に癌が見つかった話、と様々な視点で死と向き合う。本書の題名となっている第五話「その日のまえに」は、余命告知された妻をもつ夫の視点から描かれる。妻の和美が最後に許された一時帰宅で、以前暮らしていた町を訪ねる。当時の思い出を振り返りながら町を歩き、「その日」に向けた準備を進める。第六話「その日」は和美が遂に死を迎える話である。予想以上に病気の進行が早く、いつ死んでもおかしくないほど容態は悪化する。夫も子供たちも不安の中で互いにぶつかり合ったり涙を流したりして「その日」までを過ごし、とうとう和美が他界する。第七話「その日のあとで」は、和美の死後三か月が過ぎた日常を描いている。ある日、入院時世話になっていた看護師の美代子から一本の電話を受ける。会いに行くと、手渡されたのは和美が死ぬ直前に書いた手紙だった。

私が後半の三話で好きなのは、夫と出会う人々が本書に収録されている前半の四話の登場人物である点だ。各話完結していても、登場人物のその後はどうなったのかわからない。しかし、この三話が彼らの未来を描くかたちとなっている。各話の登場人物は、様々な視点から死と向き合うため、大きな壁を乗り越えてきた心強さやどこか心の底に悲しみを抱えているような繊細さも感じ取れる。登場人物と主人公が出会う時、読者である私も再会できたような喜びを味わった。

特に印象的な場面は「その日のあとで」の美代子から手紙を受け取る場面だ。自分を夫が忘れかけた頃に渡すよう和美自身が頼んでいた。手紙の内容はたった一言、「忘れてもいいよ」だけだった。亡くなる立場なら、残された方の幸せを願うのは当たり前だろう。自分のことは忘れて新たな人と再婚して幸せになってほしいと思うのが、妻として母として、そして先に逝く立場の者としての義務のような、そんな思いから書いたのかもしれない。きっとその言葉は本心なのだろうが、和美の行動と手紙の内容から言葉とは裏腹な思いも私には感じ取れた。和美の思いを推し量ると切なさがこみあげた。

最後に美代子は余命宣告を受け、「その日」を見つめながら最後の日々を過ごすことは実は幸せなのかもしれない、と言う。自分が生きている意味や死んでいく意味について、みんなが考えることができるからだ。明確な答えは出なくても考えることが答えなのだという美代子に私も同感だ。その日を迎えるまで私もこの答えについて悩み続けるだろう。自分なりに考え続けていたい。